

氏名(本籍)	井上知洋(鳥取県)
学位の種類	博士(障害科学)
学位記番号	博甲第6171号
学位授与年月日	平成24年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	読み困難児における音韻知覚と読み能力および音韻処理能力の関連性に関する研究

主査	筑波大学教授	博士(心身障害学)	前川久男
副査	筑波大学教授	教育学博士	原島恒夫
副査	筑波大学准教授	博士(心理学)	大六一志
副査	筑波大学教授	医学博士	宮本信也

論文の内容の要旨

(目的)

読み能力の習得とその障害の認知的規定因に関する従来の知見は必ずしも一貫しておらず、その一因として読み能力自体の発達の变化と、読字プロセスに關与する認知機能の变化という発達のダイナミクスが十分に考慮されていなかったことが指摘されている。また読み障害児の音韻知覚障害に関するこれまでの研究では、主に音韻記憶表象自体の静的な問題が仮定されてきたが、近年では刺激音の呈示比率や呈示順序など特定の刺激呈示文脈に依存して生起する動的なプロセス(context-dependent process)の問題の可能性が指摘されている。

本論文では、読み困難児における音韻知覚の特性と、その読み能力および音韻処理能力との関連性について検討することを目的とした。特に本論文では、児童の音韻知覚の特性について、カテゴリー知覚に反映される音韻記憶表象の性質と、雑音下音声知覚における刺激呈示比率の効果に反映される刺激文脈依存のプロセスの両面に焦点を当て、それらの特徴が読字能力の発達のダイナミクスに対してどのように關与しているかについて検討した。

(対象と方法)

対象は、学齡期の読み困難児および定型発達児であった。まず児童らの読字発達過程について明らかにするため、ひらがな読字課題(単文字・単語・非単語)と音韻処理課題(モーラ削除・非単語復唱)を実施した。続いて音韻知覚の特性について、まず音韻記憶表象の性質を検討するため、有声開始時間を変数とする刺激音声を用いたカテゴリー知覚課題を実施した。さらに刺激文脈依存の知覚プロセスを検討するため、刺激系列内における特定刺激の呈示比率が異なる2つの実験条件を設定した雑音下音声知覚課題を実施した。

(結果)

読字課題と音韻処理課題の結果、単語音読における音読潜時、非単語音読における発話時間、モーラ削除における遂行時間の3つの反応時間の有意な延長が、年齢段階や臨床的主訴の異なる読み困難児の多くに共通して認められる、ひらがなの読み困難に関する主要な特徴として示された。音韻知覚課題のうちカテゴリー知覚課題では、読み困難児群に定型発達児群の同定曲線からの有意な逸脱が見られ、カテゴリー知覚の特異

性が認められた。年齢段階ごとの分析の結果、その特異性は読み困難児の低年齢群のみに認められることが示された。雑音下音声知覚課題では、読み困難児群は刺激呈示比率の偏りに対して定型発達児群とは異なる反応の様相を示し、刺激文脈依存のプロセスの特異性が認められた。さらに個別成績の分析から、カテゴリー知覚の特異性が特に低年齢の児童において認められることが確認された。加えて刺激文脈依存のプロセスの特異性が年齢段階によらず多くの児童に認められることが明らかとなり、それが認められた児童では音韻意識の障害がより顕著であることが示された。

(考察)

本論文では、読み困難児は定型発達児とは異なる読字発達の過程を経ており、単語、非単語の両方に対して、障害のある音韻意識への負荷が高い読み方略を継続して適用することが示された。このような読字発達過程と音韻知覚の特性との関連について、定型発達児の分析結果を合わせて考えると、音韻記憶表象の問題は比較的早期の段階における文字-音対応関係の形成困難に関与し、刺激文脈依存のプロセスの問題は学齢期を通じて、部分的には音韻意識の障害を介して読みの困難に関与することが示唆された。一方で、読み困難児の個人間および個人内の両方において、音韻知覚の特性や読み能力、音韻処理能力の特性、ならびにそれらの間の関連の非等質性が考えられた。読み困難児の多くに音韻知覚の特異性が認められたことは、読み困難のメカニズムにおける音韻知覚の重要性を示すものと考えられ、彼らに対する指導実践において音韻知覚特性を把握することの重要性が指摘された。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、従来読みに困難を示す子どもの読みの習得困難の原因について、音韻知覚、音韻意識さらに近年検討され始めた雑音下音声知覚における刺激文脈依存についてそれぞれ独立に検討するとともに、それらの単語音読や非単語音読との関連を相互に関連づけて統計的に分析を行った点に第1のオリジナリティーがあると考えられる。その結果、音韻知覚ならびに音韻意識、刺激文脈依存の特異性などが発達的に読みの獲得に影響する様相を一部ではあるが明らかにした点に本論文の評価すべき点があると考えられる。対象児の多様性の問題はあがるが、読みの困難という点で共通する機能上の問題を抱える児童であり、読みの困難を引き起こす多様な要因があることを考慮する必要がある。今後、多様な要因の影響の仕方を発達的にさらに検討することで、遺伝、下位機能、社会的環境などの影響の仕方を実証的に明らかにすることが期待される。

平成24年1月10日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（障害科学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。